



なくそう教師のチクチク言葉

教師と子どもは<教える－教えられる>の関係にありますので、その意味では上下の（縦の）人間関係ですが、年齢や立場の違いはあっても同じ人間同士という点では横並びの関係にあります。子どもを「人格をもった一人の人間」として受け止め、丁寧な言葉（丁寧語中心）でかかわることは、教育職として必須の態度です。それは手のかかる子に対しても同じです。

私たちが授業参観したときに、教師の言葉や言い回しが上から目線でとげとげしく、胸が苦しくなることがあります。授業態度などを注意する場面では、きつい言葉をじっと聞いている姿に、「偉いなあ」「どう思っているのかな」「大丈夫だろうか」と心配になります。

一般に人は、何を言われたかもさることながら、**どんな言い方をされたかにとっても敏感**です。特に「見下された」「否定された」「冷たく突き放された」などと感じる人が多いと、心はダメージを受けます。元気がなくなる、投げやりな荒れた行動をとる、欠席が目立つようになるなど反応はまちまちです。子どもの中には気にせずに動じない子もいますが、殺伐とした言語環境に慣れて（見切りを付けて）しまったのだとしたら問題です。

また、ときどき見かけるのは、授業に落ち着いて取り組めない子が教師からチクチク言葉の集中砲火を浴びる一方で、他の子たちは授業に集中し、教師の問いかけにも活発に反応するなど実に熱心に学習に取り組んでいる学級です。落ち着かない子に追従する子がいなことを素晴らしいと思いつつも、どこか違和感を覚えることがあります。

小学校上学年になると、子どもは教師の言動に評価的な目を向けるようになります。

本心では教師に反感や嫌悪感を抱き、その思いを保護者に吐露したり、仲間と共有したりしながら、教師の前では一転、従順な良い子を演じ、担任（学級担任／教科担任）が替わるまでは耐え凌ぐと心に決めて学校生活を送る、そんな子どもたちが多数を占める学級があるのです。



教師は子どもたちと信頼関係で結ばれた良い学級だと思っても、実際には子どもの側は「先生は〇〇さんに冷たい。確かに〇〇さんは・・・だけど、いつも怒られてばかりで〇〇さんがかわいそう。」など、心情的には仲間をかばう側に回り、担任を敵視する構図です。

教師は、指導場面において、相手の子やその周囲の子が、**自分（教師）との関係においてどんな感情を抱くかをイメージし、察知**することが求められます。問題に気付かないまま子どもを傷付け、追い詰めてしまうと、一層の荒れや不登校にもつながりかねません（ところが、こういうケースほど、子ども自身や家庭の問題として結論付けられやすいのです）。

言葉に無頓着な教師の存在は、配慮を要する子に限らず、子どもや保護者との間に心の溝を作ってしまう。教師の言語環境の整備は、**特別支援教育推進の前提**です。人的環境たる教師が発する言葉について、継続的な点検と研修が必要です。